

「脳と心はどこから来たか」で山村を考える

全国山村振興連盟事務局長 実重重実

山村で暮らしておられる方々は当たり前のこととして実感しておられることでも、日本社会全体ではあまり分かっていないことがあります。それは、自分の生きている生活空間のすべては、生命によって成り立っているということです。木々の緑や日々の食料は当然のことですが、私たちが生かされている空気や水や土も、すべて生命が生み出したものです。

そして農林業とは、生命を育てるということであり、育児と同様のものなのだと、私は考えます。そうした観点から世界の見方を学び直すという考え方に立って、私は太古の地球から生命がどのようにゆっくりと範囲を広げ、また複雑化してきたかということを探求してきました。

私は、生命の活動のすべてを「認識が調節している」という考え方を持っています。認識というのは、私たち人間で言えば感覚や情動といったものですが、細菌など単細胞の世界にも、それに似たような原始的な認識はあります。

この度、哲学・心理学等の専門出版社である新曜社から、「脳と心はどこから来たかー主体的認識の進化を探る航海へ」という本を出版しました。

ヒトの脳は、知られている宇宙の中で最も複雑なものだとされています。私は、複雑な脳から出発するのでは見えないことがあると考えて、最も単純な単細胞の生物から、認識というものがどのように階層的に組み上がっていくかを探究しました。

本書には、自分の身体を子供たちに食べさせるコブハサミムシ、鏡で見て自分を確認するホンソメワケベラ、頭部に3つの眼があるムカシトカゲ、助産師の役割をするクジラなど、生物たちの楽しい生態がふんだんに登場します。そして、それを進化のプロセスとして追跡し、ヒトの複雑な脳がどうやってでき上がって来たのかについて、描いていきました。

専門用語を用いないで、多彩な生物の生態を見ているうちに、生物学・脳科学の最先端まで迫れるようにしたつもりです。終盤では一つ一つの断片的な事実が繋がって、壮大な生命の流れが見えてくると思います。

新曜社からの第1作「生物に世界はどう見えるか」は、豊島岡学園女子中学校（2021年国語）、関西大学（2021年社会人入試）、実践女子学園中学校（2022年国語）、同志社女子大学（2023年国語）、北星学園大学（2026年国語）の入試問題で採用されました。また、第2作「感覚が生物を進化させた」は、東京海洋大学（2024年小論文）の入試問題で採用されました。

複数の中学校の入試問題でも取り上げていただいているのは、中学生でも面白く読めるようにというつもりで記述しているからだと思います。

生物たちの多彩な生態を見ながら、脳と心がどのように進化していったのか、自然に取り巻かれて暮らしておられる山村関係者の方々にこそ、探索の旅を楽しんでいただきたいと思っています。